

懐疑主義に対する或る古代の批判

——アリストクレス『哲学について』より——

金 山 弥 平

はじめに

真実と思われるものを前にして、立ち止まって反省し、本当にそうなのかと疑ってみることは、生まれつき知ることを欲求する人間に固有のことであるが、しかし、通常人々は、この疑いに止まることをせず、探求の道を進んだ末に自ら発見したと思う真実を判断の形で表わそうとする。そして、このように考察の結果として判断を下すのも、やはり人間に固有のことであり、また自然の傾向でもある。しかし、自ら「探求者」(ゼーテーティコイ)、「考察者」(スケプティコイ)を名のった古代のピュロン主義者たちは、後者の自然の傾向を極力押さえ、前者の反省的疑いの内にできるだけ止まろうとした。彼らは、判断を真実発見の道を閉ざすもの、心を乱すものとして回避し、判断保留の正当性を議論によって示そうとしたのである。ここから「スケプティコイ」は懐疑主義者の意味をもつようになる。しかし当然ながら、自然の傾向に逆らって懐疑を貫こうとする彼らの生き方と、それを支持する彼らの議論に対しては、言行の不一致、議論それ自体の矛盾等々の批判が突き付けられた。以下に示すメッセネのアリストクレス『哲学について』からの断片も、古代におけるそのような批判の一つである¹⁾。

アリストクレスは、Zeller 以来²⁾、アプロディシアスのアレクサンドロスの師とみなされ、後2世紀の哲学者と考えられてきた。しかしこれは、写本の「アリストテレス」を「アリストクレス」に読みかえることに基づき、そのままでは支持できない想定である。今日では、アレクサンドロスの師はむしろミュティレネのアリストテレスであり、アリストクレス自身は、彼の断片のうちに残る他の人々への言及に基づき、前1世紀の終わりか、あるいは、紀元1世紀の初めに活躍した人と考えられている³⁾。本稿で紹介する懐疑主義への批判は、アリストクレスが、彼以前の代表的哲学者、およびその思想を網羅的に取り上げて論じる全10巻の書物『哲学について』(*Peri philosophias*)に含まれていたものである。同書は失われたが、主としてエウセビオス『福音の準備』(*Eusebius, Praeparatio evangelica*)を通してその一部が現存しており、断片集としては、H.Heiland, *Aristoclis Messenii reliquiae, Diss.* (Gießen, 1925)がある⁴⁾。

エウセビオス『福音の準備』第14巻2章4－6節⁵⁾

[4] この体操競技のわれわれの競技場には、すでにわたしが示した人たちだけでなく、あらゆる真理を脱ぎ捨てて裸になり、ドグマティスト哲学者すべてに向かって、武具を取り上げ、戦いを挑んだ人たちも参集するであろうし——わたしが言っているのは、人間たちの間では把握可能なものは何もないと表明したピュロン一派のことである——、アリスティッポスにならって、受動的にこうむる諸々の情態のみが把握可能であると言った人たちも、さらにまたメトロドロスやプロタゴラスに従って、身体に属する諸感覚だけを信用しなければならない、と主張した人たちも集まってくるであろう。[5] またこの人たちと一緒に、クセノパネスとパルメニデスの一派、つまり彼らと対峙して陣を敷き、諸々の感覚を否定する人たちも、その服を脱がせて、われわれは競技に参加させるであろう。[6] さらにわれわれは、快樂の同盟者たちをも見過ごすことはせず、先述の人たちと一緒に、彼らの指導者であるエピクロスも競技の登録者に加えるであろう。そして一人も漏らすことなく、以上の者たちすべてに対する反駁を、彼ら自らが用いる武器を用いて行なうであろう。

エウセビオス『福音の準備』第14巻17章10節⁶⁾

[10] クセノパネス一派は、上記のような人たちであった。このクセノパネスは、ピュタゴラスやアナクサゴラスの一派と同時代に活躍したと言われている。ところで、クセノパネスの弟子にはパルメニデスがあり、パルメニデスの弟子にはメリッソスがあり、メリッソスの弟子にはゼノン、ゼノンの弟子にはレウキッポス、レウキッポスの弟子にはデモクリトス、デモクリトスの弟子にはプロタゴラスとネッサスがいた。またネッサスの弟子にはメトロドロス、メトロドロスの弟子にはディオゲネス、ディオゲネスの弟子にはアナクサルコスがいた。そしてピュロンは、このアナクサルコスの弟子となつたのであり、このピュロンから、懷疑派と呼ばれる人たちの流派が成立することになった。この懷疑派自身は、把握されうるものは、感覚のうちにも理性(言論)のうちにもまったくなく、と規定し、あらゆる事柄において判断を保留したのであるが、彼らとは反対の見解に立つ人たちが、彼らをどのようにして論駁したかということは、先に示した著作から学ぶことができる。その著作では次のように語られている。

アリストクレス『哲学について』より (Fr. 6 Heiland)⁷⁾

(エウセビオス『福音の準備』第14巻18章1－30節)

(ピュロンの徒である懷疑派、あるいは判断保留派と呼ばれ、
何もかも把握できないと表明した人たちに対して)

[1] 何よりもまず最初に、われわれ自身の認識について考察しなければならない。というのも、もしもわれわれ自身、自然本来的に何も認識できないということであれば、もはや他の諸々の物事について考察する必要はまったくなくなるからである。[2] ところで、古の人たちのなかにも、まさにこのとおりの発言をした人たちは何人かいて、その人たちに対しては、アリストテレスが反論を行なった。エリスのピュロンも、そうした発言をすることで力を誇示した人の一人である。しかし、彼は自分では何も書き残さず、彼の弟子であるティモンが、幸福になろうとする者は次の三つの事柄に目を向けねばならないと言っている。第一に、諸々の物事の自然のあり方はいかなるものであるか。第二に、われわれはそれらに対していかなる態度をとらねばならないか。最後に、しかるべき態度をとる人たちには何が結果してくるのか。[3] ティモンが語るところでは、ピュロンは次のように表明している。

——諸々の物事は、等しく無差別で、不安定で、判定不可能である。したがって、われわれの諸感覚と、われわれが抱く諸々の思いなしのいずれも、真実を告げるものでも、虚偽を告げるものでもない。それゆえ、われわれは、それらのものを信用してもならず、むしろ無判断、無傾向、無動揺でいて、それぞれ一つ一つのものについては、あらぬよりいっそう多くある、ということはない、あるいは、あつかつあらぬ、あるいは、あることもあらぬこともない、という言い方をしなければならない。

[4] ティモンは、そのような態度をとる人たちに結果として訪れるのは、第一に無主張であり、ついで無動揺(平静さ)であろうと言い、アイネシデモスは、快樂であろうと言っている。

[5] 言われていることの要点は以上のとおりである。われわれはそこで、彼らが語っていることが正しいかどうか、考察することにしよう。ところで彼らは、すべてのものが等しく無差別であって、それゆえ何ものにも同意してはならず、思いなしを抱いてもならないと言っているのであるから、わたしが思うに、当然ひとは、彼らに次のように尋ねるであろう——物事に差別があると考える者たちは、はたして間違っているのか、それとも間違っていないのか。もしも間違っているとすれば、そう考える者たちは、確かに不当な想定をしていることになるだろう。そしてそこから、存在する物事について虚偽の思いなしを抱く者たちが確かにいる、と彼らは言わねばならないことになる。他方、彼ら自身は、真実の主張を行なう者であるだろう。そうするとさらに、何か真なることと偽なることがあることになるであろう。

しかし他方、存在する物事に差別があると考える点で、もしもわれわれ多数者が間違っていないとするなら、いったいどうして、彼らはわれわれを攻撃するのであろうか。というのも、物事は無差別であると主張する、ほかならぬ彼らが、間違っていることになるのだから。

[6] さらに、もしもわれわれが、彼らに譲歩して、すべてが等しく無差別であることを認めたとしても、その場合には明らかに、彼ら自身、多くの人たちと差別がない、ということになるであろう。しかし、もしもそうであるなら、彼らの知恵はいったい何なのだろうか。またどうして、ティモンは、他の人たちすべてのことを悪く言いながら、ピュロンだけを賛美するのであるか。

[7] さらに、もしもすべてが等しく、無差別であって、それゆえに、いかなる思いなしももってはならないとするなら、次のことも無差別であることになるだろう。わたしが意味しているのは、差別があるか、あるいは無差別であるか、ということ、また思いなしをもつか、あるいはもたないか、ということである。というのも、いったいどうして、これこれであらぬよりも、よりいっそう多くこれこれである、ということになるのだろうか。あるいは、ティモンが言っているように、「何ゆえに然りなのか」、「何ゆえに否なのか」、また「何ゆえに」そのものが、何ゆえなのか⁸⁾。

こうして、探求することが否定されることになるのは、明らかである。したがって、彼らには、面倒をかけるのは止めにしてもらいたい。というのも、少なくとも現在のところ、彼らは、われわれに思いなしを抱かないように命令しつつ、しかも同時に、思いなしを抱くよう命令しているのであるし、また何ごとについても意見を表明してはならないと言いつつ、次には自分たちの意見を表明している、といった具合で、技術からは遠く離れ、気が狂ってしまっているのである。それにまた彼らは、一方では、何ものも承認しないよう要求しながら、他方では、自分たちに従うように命令している⁹⁾。その上、何も知っていないと言いながら、あたかも自分たちはよく知っているかのように、あらゆる人々を論駁している。

[8] さらに、あらゆるものが不明瞭¹⁰⁾であると主張する人たちは、沈黙を守るか、あるいは何か意見を表明し、言葉を発するか、のいずれかでなければならぬ。しかし、彼らが黙っているなら、そんな者たちに対しては、明らかに、いかなる議論もなしえないであろう。他方、彼らが意見を表明するとすれば、確かに彼らは、何かはこれこれであると言うか、これこれでないと言うか、のいずれかであるだろう。それはまさに、彼らが今、すべてのものは認識不可能で、すべての人によってそうみなされているだけであり、認識されうるものは何もない¹¹⁾、と主張することによって行なっていることである。

[9] その場合に、そう主張する者たちは、物事を明らかに示しており、そして、語られていることは理解可能なのであろうか、あるいは、理解不可能なものであろうか。しかし、もしも明らかに示していないとするなら、この場合もそんな者に向かつてはいかなる議論もなしえないであろう。他方、もしも何ごとかを表示しているとするなら、まったく無限定のことを語っているか、あるいは限定されたことを語っているか、のいずれかでなければならぬ。もしも彼が無限定のことを語っているとするなら、その場合にも、彼と議論することはできないであろう。というのも、無限定のことについては認識は成り立たないからである。他方、示されて

いるのは限定されたことであるとするなら（ともかく、いずれか一つだけでも限定されているなら）、それを語っている人は何かを規定し、判断していることになる。しかし、そうだとすると、どうしてすべてが認識不可能であり、判定不可能である、ということになるのであろうか。

他方、彼が語っていることが、同じものがありもするし、かつあらぬものでもある、ということであるなら、第一に、同じものが真でもあり、かつ偽でもあるということになるだろうし、さらに、彼は何かを肯定し、かつ否定していることになって、一方では言明をしつつ、同時にその言明を否認していることになるだろうし、さらに、自分が虚偽を語っていることに同意しつつ、自分を信用しなければならないと求めていることになる。

[10] また、すべてが不明瞭であると彼らが言うとき、どこからそのことを学んだのか、探求してみる価値もある¹²⁾。というのも、明らかな事柄とはいったい何であるのか、彼らはあらかじめ知っていなければならないのである。実際、そうして初めて、彼らは、諸々の物事はそのようなものではない、とすることができるであろう。なぜなら、まず最初に肯定を知った上で、次に否定を知らなければならないからである。もしも彼らが、明らかな事柄とはいかなる事柄であるのか、知らないとするなら、彼らは、不明瞭なことは何か、ということも知ることはできないであろう。

[11] 実際アイネシデモスが『概要』の中で9つの方式を詳述するとき——彼はそれだけの数の方式にしたがって、諸々の物事が不明瞭であることを示そうとした——、この人はこれらの方式のことを知っていて語っている、とわれわれは言ったものであろうか、あるいは、知らないで語っていると言ったものであろうか。というのも、彼は、動物相互には差別があるし、われわれ人間も相互に異なるし、国同士も、生活の仕方も、習慣も、法律も互いに異なると言っているのである。また彼は、われわれがもつ諸々の感覚は弱く、多数の外部的要因——距離、大きさ、動き——によって認識は損なわれるとも語っている。さらに、若者と老人、目覚めている人と眠っている人、健康な人と病気の人は、同様の状態にはない。また、われわれが捉えるものには、単純で混じり気のないものは何もない。[12] なぜなら、すべてのものは混ざり合っていて、相対的に語られるからである。

わたしが言いたいのは次のことである。彼は、以上述べたことや、そうした内容のことをあれこれと巧妙に語ってはいるが、その彼に対して、次の質問を投げかけてみたいと思う人はいらぬであろう。アイネシデモスは、物事のあり方が実際そうであることを、よく知って語っているのか、それとも知らないで語っているのか？ というのも、もしも彼が知らないとすれば、どうしてわれわれは、彼の言うことを信用できるだろうか。他方、もしも彼が認識しているとすれば、すべての物事は不明瞭であると表明しながら、同時にそれだけのことを知っていると主張するのであるから、この人はまったくのお人よしでしかないことになるだろう。

[13] さらにまた、少なくとも彼らがそうした事柄を詳述する場合には、実は彼らは、ほか

ならぬある種の帰納を行なって、諸々の現われるもの、すなわち諸々の個物¹³⁾がいかなるものであるか、ということを示しているのである。しかし、そうした事柄は「信念」(ピステイス)であり、またそう呼ばれているものである。かくして、もしもその「信念」を彼らが承認するとすれば、明らかに、彼らは思いなしをもっていることになる。他方、もしも彼らがそれを信用しないとすれば、われわれとしても、彼らに耳を傾けようとは思わないであろう。

[14] 実際ティモンが、『ピュトン』の中で長々と話を繰り返して物語っているのは、まさしくそうしたことである¹⁴⁾。つまり彼は、ピュトの地に向かって歩みを進めるピュロンに、アンピアラオスの神殿の傍らで出会った次第と、問答を交わした内容を物語っている。だが、それらの事柄を執筆しているティモンの傍らに、だれかが立って、次のように尋ねたとしたら、その質問は理にかなったものではないだろうか。「惨めな人よ、どうしてきみは、それらのことを執筆し、きみが知らないことを物語って、自らに煩いを与えるのか。というのも、きみが彼に出会うことはなかった、というより、よりいっそう多く出会った、というのは、どういうことなのか?¹⁵⁾ また、きみが問答を交わさなかった、というより、よりいっそう多く問答を交わした、というのは、どういうことなのか?」

[15] またかの驚くべきピュロンも、ピュティア競技を見物しようとして自分が何ゆえに歩いているのかを、その時¹⁶⁾、はたして知っていたのだろうか。それとも彼は、気の狂った人のように道を彷徨っていたのであろうか。また、人間たちとその無知とを非難の対象にしはじめるときにも、彼は真なることを語っていると、われわれは言ったものであろうか、それとも真なることを語ってはいない、と言ったものであろうか。またティモンは、何らかの情態を受け、語られた議論に承認を与えていると言うべきであらうか、それとも、それらの議論に心を向けてはいない、と言うべきであらうか。というのも、もしも彼が説得されたわけではないとするなら、どうして舞踏家を止め、哲学者になったのであろうか、また、どうして終生、ピュロンのことを驚嘆し続けたのであろうか。他方、ピュロンの議論を承認したとするなら、自分自身は知を求め(哲学し)ながら、われわれにはそれを禁じており、その点でおかしな奴であることになるだろう。

[16] まただれにせよ、ただただ驚くしかないであろう——ティモンの『シロイ』と、あらゆる人間に対する誹謗と、アイネシデモスの長々とした『概論』と、そうした言葉の群れは、彼らにとっていったいどんな意味をもつのか、と。というのも、もしも彼らが、われわれをより善き者にしようと思ってそれらを記しており、それゆえ、あらゆる人を論駁しなければならぬと考えるその目的が、われわれが馬鹿話にうつつを抜かさないように、ということであるなら、彼らは明らかに、われわれが真理を知り、諸々の物事はピュロンが主張するとおりのものであると想定するように、願っていることになる。したがって、もしもわれわれが彼らの説得を受け入れるなら、確かにわれわれは、より悪しき者であることを止め、より善き者に変わるであろうが、しかしそれは、われわれが、より有益な物事について判断を下し、より善く語

ってくれる人たちを受け入れたからなのである。[17] してみると、どうして諸々の物事は、等しく無差別で、判定不可能でありえようか。またどうして、無承認、無判断の態度をわれわれはとりえようか。

他方、彼らの議論に何の益もないのであれば、どうして彼らはわれわれを¹⁷⁾煩わせるのであろうか。あるいは、何ゆえにティモンは「ピュロンに対しては、他のいかなる死すべき者も争いえないであろう」と言うのであろうか。というのも、その場合にはだれにせよ、愚かさの点で抜きん出ていると思われるかのコロイボスとか、メレティデスのことで驚嘆するよりも、よりいっそう多く、ピュロンのことで驚嘆することはないであろうから。

[18] さらにまた、次のことも心に留めなければならない。ああした輩は、どんな市民になることができるというのか。どんな裁判官に、どんな忠告者に、どんな友人に、あるいは一言で言って、どんな人間になりうるのであろうか。あるいはまた、美しい(立派な)ことも、醜いことも、正しいことも、不正なことも、真実のところは何もない、と考える者は、いかなる悪いことでもあえてやってみようとするのではないか。というのも、法律とか法律が下す罰を、そうした者が恐れるということさえ、だれも断言はできないであろう。彼ら自らが語っているように、無情態、無動揺であるとしたら、どうして彼らが、法律や罰を恐れることがあろうか。[19] 少なくともかのティモンは、まさにピュロンについてそんな風に言っているのである。

しかし、このわたしが目にしたのは、何という謙遜な方、
あらゆるものの支配から何と自由な人。名なき者も、名ある者もすべて含めて、
死すべき人間の軽き種族が、
種々被った情態やら、思いなしやら、気まぐれなる立法によって、
そこここで重くせられて屈服せる、あらゆるものの支配から免れて。

[20] それにまた彼らが、自然と諸々の習慣とにしたがって生きなければならず、また何ごとも承認してはならない、とする彼らの知恵を語るとき、彼らはまったくのお人よしでしかない。というのも、他の事柄はともかくとして、少なくとも、何ごとも承認してはならないというそのことを、彼らは承認しなければならないのであり、まさにそのとおりであると想定しなければならないからである。それに、もしも彼らが、何も知っておらず、判断を下す手段となるものを何ももっていないとするなら、どうして、自然と諸々の習慣に従う必要が彼らにない、というより、よりいっそう多く従う必要がある、ということになるのか?¹⁸⁾

[21] というのも、彼らは、あらゆるものが不明瞭であると主張する言論は、他の諸言論と一緒にそれ自体をも否認する——それはちょうど、浄化剤(吐下剤)が余計なものと一緒に、それ自体を排出するのと同じようなものである——と語るのであるが、しかしその発言はまったく間の抜けた発言なのである。なぜなら、彼らのその言論がそれ自体を反駁するとするなら、

その言論を口にする人は、無駄なおしゃべりをしていることになるからである。むしろ彼らは、沈黙して、まったく口を開かない方がましであろう。

[22] いやむしろ、浄化剤と彼らの言論では事情が異なるのである。なぜなら、浄化剤は排出され、身体の内には留まることはないが、言論の方は、いつまでも同じまま、信念となって魂の内では存立しつづけなければならないからである。というのも、この言論がとどまるからこそ、彼らは不承認の態度をとり続けるのであろうから。

[23] 人間が無判断でいられないことを、さらに人は次のような仕方でも知ることができるだろう。つまり、知覚している人が知覚しない、ということは不可能である。しかるに、知覚する、ということは何らかの認識である。また、人が知覚を信用することも、万人に明らかなるところである。なぜなら、人はより正確に見ようと欲して目をこすり、また近づいて行って、手を目の上にかざしたりするからである。

[24] それにまた、われわれは快を感じたり、苦痛を感じたりすることを知っている。というのも、焼かれたり、切られたりしている人が、そのことを知らないでいることは不可能だからである。記憶や想起が生起する場合にそれに想定が伴うということ、だれが否定できようか。また、人間とはこれこれのものであるといった共通概念や、諸々の知識とか技術について、人は何を語りうるであろうか？ というのも、もしもわれわれが諸々の事柄を想定するように生まれついていなかったとしたら、知識や技術はまったく存在していないであろうから。わたしは他の点は見過ごしてもよい。しかしともかく、われわれが、彼らの言うことを信じるにせよ、信じないにせよ、かならずや、思いなしはもたざるをえないのである。

[25] かくして、この方式で知を求めること（哲学に携わること）が、不可能であることは明らかである。それに、それが自然に反しており、法にも反していることを、われわれは次の仕方で見ることができるであろう。もしも実際に諸々の物事が、彼らの言うようなものであるとしたら、われわれは、夢の中のように、気まぐれで、支離滅裂な生き方をするしかないであろう。したがって、立法家や将軍や教育者は、無意味なおしゃべりをしていることになるであろう。しかし、少なくともわたしに思われているところでは、他の人々はすべて、自然に適った生き方をしており、あのように無駄口をたたいている人たちだけが、思い上がっているのである。いやむしろ彼らはまったく狂っているのである。

[26] 以上のことは、とりわけ次の点から学ぶことができるであろう。というのも、カリュストスのアンティゴノスは同じ頃に生き、彼らの伝記を記した人であるが、その彼が語るところでは、ピュロンは犬に追いかけて木の上に逃げ、そこに居合わせた人たちによってからかわれた時に、人間を脱却するのは困難であると言った。また彼の姉妹のピリスタが犠牲を捧げることになっていたとき、友人の内のだれかが犠牲のために必要なものをもってくと約束しておきながら、もってきてくれなかったため、ピュロンがそれを買うことになって腹を立てたところ、その友人が、ピュロンの行動は言っていることと一致していないし、無情態

にもふさわしくない、と言ったので、ピュロンは、女性に関してどうして¹⁹⁾無情態の態度を証明しなければならないのか、と答えたということである。

しかし、その友人が次のように応答したら、その言い分は正しかったであろう——無益な試みをする人よ、もしもきみのそれらの言論が何か効力をもつとすれば、当然、女性に関しても、犬に関しても、また他のいかなる物事に関しても、一貫して無情態を示さねばならないのだ。

[27] ところで、彼の弟子になった人たちがだれであって、また彼自身だれの弟子であったか、ということを学んでおくのは当を得たことである。ピュロンは、アナクサルコスという人の弟子であったが、最初は画家であり、この方面ではそれほど成功しなかった。その後、デモクリトスの書物にたまたま出会い、何か役に立つことを見出すことも、執筆することもなく、すべての者を——神々も人間もみな——、悪しざまに語ったのである。そしてその後、自分自身はかの思い上がりを身にまとい、そして思い上がりなき謙遜家と自称したのであるが、何であれ書き物にして残すことはしなかった。

[28] 彼の弟子になったのは、プレイウスのティモンであった。この人は最初は諸々の劇場でコロスの一員として踊っていたが、後にピュロンに出会い、小うるさく下品なパロディを著作中で記し、かつて哲学に携わった人たちをだれもかれも中傷した。というのも、『シロイ』を執筆して、

惨めな人間たちよ、悪しき恥、単なる胃袋よ。

このような争いと、このような呻きとから汝らは作られているのだ

とか

人間たちよ、空しき思いで満たされた革袋よ

と語ったのはこの人だったのである。

[29] そして、彼らに注意を向ける人はだれ一人なく、あたかも最初から彼らは生まれもしなかったかのようにであったが、しかし、つい最近になって、エジプトのアレクサンドレイアで、アイネシデモスとかいう男が、この馬鹿話にもう一度火を灯そうとし始めた。この道を進んだ者の中で、最も強力だと思われた人たちは、だいたい以上の人たちである。

[30] ところで、このような学派(ハイレスス)、あるいは諸議論の方針(アゴーゲー)、あるいは他の名前前で呼びたいと思う人がいるならその名で呼んでくれて結構であるが、ともかく、それが正しい道であると言う人は、明らかに、思慮ある人の内にはだれもないであろう。というのも、知を求める(哲学する)ことを成り立たしめる諸原理を少なくとも否認している以上は、それを哲学と呼ぶことも許されないと、ともかくわたしは考えるのである。

エウセビオス『福音の準備』第14巻18章31節²⁰⁾

(31)以上が、ピュロンにならって哲学をしたとされる人たちに対する反論である。受動的にこうむる諸々の情態だけが把握可能であると主張し、キュレネのアリステイッポス流の哲学を行なった人たちに対する反論も、これと同じようなものとなるであろう。・・・

エウセビオス『福音の準備』第15巻1章10節²¹⁾

先の記述において、明らかに、ある場合にはプラトン哲学は、ヘブライ人の言論と一致していたが、別の場合にはそれと隔たっていた。またその記述の中で、プラトン哲学は、自らの教えとも反目するということで論駁されたし、別の人たち——自然学者と呼ばれた哲学者たちや、プラトンの流れを汲む人たち、さらにはクセノパネスとパルメニデスの一派、ピュロンと判断保留を導入した者たちの一派、またそれに続く他の人たちすべて、つまり、およそ先の議論がその見解を論駁したところの人たち——は、その立場が、ヘブライ人のドグマにもプラトンのドグマにも対立するものとして、すなわち真理そのものに対立するものとして、反駁されたのである。しかも彼らは、自分たち自身の武器によって、自らの立場の論駁を招いたのである。

註

- 1) 他にも、ピュロン派に対する批判としては、Galenus, *De dignoscendis pulsibus*, Kühn vol. 8 pp. 781-783; Sextus Empiricus, *Adversus mathematicos*, 11. 162-166 (また DL 9.62) を、アカデメイア派に対する批判としては、Plutarchus, *Adversus Colotem*, 1122a-b; *De Stoicorum repugnantibus*, 1057a; Epictetus, *Dissertationes ab Arriano digestae*, 1.5 (また DL 7.171) を参照。さらに近世哲学からの裁定については、D. Hume, *An Enquiry concerning Human Understanding*, §XII, 128を参照。なお、ドグマティストからの懐疑主義批判に対して、古代懐疑主義者は彼ら自身の周到な答えを準備した。下記のアリストクレスからの批判に対して、懐疑主義者ならこう答えたであろうと予想されるところを示す試みは別の機会にまわすが、懐疑主義からの議論を簡単に述べたものとしては、例えば、金山弥平「理性と古代懐疑主義——人間と非理性的なもの」『アルケー、関西哲学会年報』No. 3 (通巻30号), 1995, pp. 143-149を参照されたい。
- 2) E. Zeller, *Die Philosophie der Griechen in ihrer geschichtlichen Entwicklung*, III / 1 (Leipzig, 1923⁵⁾, p. 814 n. 1; p. 815 n. 3. 金山弥平「エリスのピュロン資料集——その人と思想と伝承——」(平成7年度科学研究費補助金(一般研究(C))研究成果報告書, セクストス・エンペイリコスにおける懐疑の諸形態), p. 62も, Zeller の線でアリストクレスの年代を記していたので訂正したい。
- 3) Eusebius, *Praeparatio evangelica*, 15.2.13におけるペリパトス派のアペリコン(前88-84頃逝去)への言及, および14.18.29におけるアイネシデモスへの言及——後者は本文に訳出されているが, とくにそこで「つい最近になって」(echthes kai prôên) と記されている事実——に基づく。詳しくは, P. Moraux, *Der Aristotelismus bei den Griechen von Andronikos bis Alexander von Aphrodisias*, vol.

II (Berlin, 1984), pp. 83-92, 399-401, および、簡潔な説明としては *Dictionnaire des philosophes antiques*, vol. 1 (Paris, 1989), p. 382を参照。もしもアリストクレスの活躍した時代を前1世紀の終わりか、あるいは、紀元1世紀の初めとする解釈が正しければ、かれは、ガレノス(129頃-3世紀初頭)、セクストス・エンペイリコス(200頃)、ディオゲネス・ラエルティオス(3世紀前半)よりかなり以前、プルタルコス(46頃-120頃)、エピクテトス(50頃-130頃)およびファウオリス(80/90頃-2世紀中頃)よりわずかに前、ポセイドニオス(前135頃-前50頃)やアイネシデモスよりわずかに後、『プラトン「テアイテトス」註釈』の名前不祥の作家(前1世紀後半?)とひょっとして重なり合う時代に生きたことになる。アリストクレスの作品が、ピュロン自身の哲学に関する貴重な断片を含んでおり(本文でも訳出されている Eusebius, *Praeparatio evangelica*, 14.18.1-4)、その解釈がけっして一様でないことを考えるとき、かれが後2世紀に生きたか、それとも前1-後1世紀に生きたかによって、他の哲学者の証言との比較の中で、かれの証言をどう解するかということも、かなり影響を受けるように思われる。

- 4) 以下に示す訳は、部分的には、金山「エリスのピュロン資料集——その人と思想と伝承——」(註2)で訳出した部分と重なるところがある。しかし、本稿は、懐疑主義に対するアリストクレスの批判を、かれが紹介する懐疑主義の証言とともに考察する独立の資料(あるいは、懐疑主義の証言をアリストクレスによる批判というコンテクストの中で考える独立の資料)として意図されたものであるから、あえて繰り返しを避けないことにした。また名前のよく知られていない哲学者の説明も(最小限の範囲であるが)繰り返しとなっているところがある。漢数字を[]で囲んでいるのは、前掲報告書において採用した証言番号であるから、詳しいことはそちらを参照されたい。
- 5) エウセビオス自身の言葉([五一])。キュレネ出身のアリスティッポス(前435頃-355頃)は、ソクラテスの親しい仲間の一人であったが、ソフィストでもあり、仲間の中で最初に報酬をとって教えた。身体的快楽を人生の目的とする快楽主義で有名なキュレネ派の祖であるが、ただし同名の孫を祖とする説もある。キオスのメトロドロス(前4世紀に活躍)はデモクリトスの弟子、あるいは少なくともデモクリトス原子論の継承者であり、原子論の立場から「われわれは何も知らない、何か知っているか知っていないかも知らない」という懐疑主義的発言を行なった。
- 6) エウセビオス自身の言葉([三六])。この箇所(17章の最後の部分)は、エウセビオスが、アリストクレスの『哲学について』の中から、感覚を斥けたクセノパネス、パルメニデス、ゼノン、メリッソス、スティルポン、メガラ派などに対する反論を引用した直後の部分である。このあと続けて、『福音の準備』第14巻2章4-6節のプログラムに従って、ピュロン派に対する反論(18章)、アリスティッポス派に対する反論(19章)、メトロドロスやプロタゴラスに対する反論(20章)、エピクロス派に対する反論(21章)が、『哲学について』から引用される。なお、ネッサス(またはネッソス)は、ここで記されているとおり、デモクリトスの弟子、メトロドロスの師であり、またメトロドロスと同じくキオス出身である(DL 9.58)。スミュルナ(一説ではキュレネ)のディオゲネスは、この箇所およびDL 9.58で語られているとおり、メトロドロスとアナクサルコスを結ぶ人物であり、レウキッポスやデモクリトスと同じく、感覚的諸性質はノモス(習わし)の上のことにすぎないと考えたとされる(H. Diels, *Doxographi Graeci* (Berlin, 1976⁴), p. 397)。アナクサルコスはアプデラ出身の哲学者(前340-337頃が盛期)。DL 9.58-60にその生涯が簡単に記されている。アパテイア(無情態)と人生に対する満足のゆえに、「幸福な人」(Eudaimonikos)と呼ばれていた(DL 9.60)。アレクサンドロス大王のインド遠征に加わったとき、同地で出会った裸の行者から大きな影響を受けたと伝えられる(DL 9.63=[一六])。アナクサルコスを通して、デモクリトス原子論における懐疑主義的要素がピュロンに伝えられた、とする解釈もある。本文中の「先に示した著作」とはアリストクレス『哲学について』のことである。
- 7) 1-4, 7節は [三九], 6節は [四二], 14-15節は [四三], 16-17節は [四四], 18-19節は

- [四五], 26節は [二九], 27節は [四七], 28-30節は [四八] に相当する。
- 8) 『何ゆえに』そのものが、何ゆえなのか」と訳した部分について、ほとんどの写本は kai auto to dia ti とだけ記し、dia ti を二度繰り返してはいないが、Diels (註6), p. 176は dia ti を二度繰り返し、kai auto to dia ti dia ti としている。ここでは Diels に従って訳した。しかし、kai auto to dia ti だけを読んで、『何ゆえに』そのものは(どうなのか)? という意味で解することも可能かもしれない。
- 9) Heiland は autois tois keleuousin としているが、Diels や Dindorfius の読み方 autois keleuousin を採用する。
- 10) これまでは、ピュロンの言葉にあった「無差別」(adiaphora)という言葉を手掛かりにアリストクレスは批判をしていたが、ここからは「不明瞭」(adela)あるいは「認識不可能」(agnôsta)という、ピュロンの言葉ではなかった可能性の高い用語も用いて反論を行なう(ただし、「判定不可能」(anepikrita)は、実際に彼が用いたかどうかはともかく、ピュロンの立場に関する説明において用いられていた)。おそらくアリストクレスの批判の標的は、ピュロンからピュロン主義一般に移るのであろう。実際、アイネシデモスも批判対象として取り上げられることになる。
- 11) とりあえず、hôs ではなく gnôston を読み、gnôston d'ouden (vulgo)を訳したが、しかしこの場合は、難点として「すべてのものは認識不可能である」ということと同じ内容のこと(「認識されうるものは何もない」)が繰り返されることになる。nomista pasi, hôs d'ouden (写本, Diels, p. 177)を採用すれば、「すべての人によってそうみなされてはいるが、実際にそうであるものは何もない」となる。また Diels が提案する nomista, pagiôs d'ouden <katalêpton> を読むなら、「そうみなされているだけで、確実に把握されうるものは何もない」と訳することができる。
- 12) pothen kai の kai を Heiland の提案により axion de の後にもってくる。
- 13) 「現われるもの」と訳したのはしばしば「現われ」とも訳している語 to phainomenon である。ここでは kai を「すなわち」の意味で解した。具体的には、例えば、「ソクラテスとして現われるものがいかなるものであるかを、帰納を用いて認識し、信じて口にしてしている」ということになるであろう。しかし、kai を付加の意味でとり、「現われとはいかなるものであり、また個物とはいかなるものであるかを・・・」という意味にとることも可能であろう。
- 14) ho の先行詞として、to ... toiouto —つまり帰納によって得られる「現われるもの、すなわち個物がいかなるものであるか」、「ピステイス」として同定されるもの——が理解されていると考える。
- 15) ピュロン主義者が用いる表現 (ti mallon)。セクストス『ピュロン主義哲学の概要』第1巻189節参照。
- 16) tote, ti (Diels, Heiland)を読む。
- 17) ti mên ではなく、ti hêmin を読む。
- 18) 註15と同じく ti mallon という表現。
- 19) ti を補う (Wilamowitz)。
- 20) エウセビオスの記述に戻る。[五〇]。
- 21) エウセビオスの記述。[五二]。